

Abhisamayālaṃkāra XVI における
「離一多自性論証」の和訳(1)
—極微論批判を中心に—

現観荘嚴論光明研究会

研究会メンバー 間中充（龍谷大学非常勤講師）
桑月一仁（浄土真宗本願寺派宗学院研究生）
秦野貴生（大谷大学大学院）
道元大成（龍谷大学大学院）
北山祐誓（龍谷大学大学院）
中山慧輝（日本学術振興会特別研究員 DC2）

はじめに

本稿は、ハリバドラ（Haribhadra, 800 頃）が著した *Abhisamayālaṃkāra*（『現観荘嚴論光明』、以下 AAA）の中に見られる「離一多自性論証」の和訳である。この箇所は、*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*（『八千頌般若経』）第 XVI 章 Tathatāparivarta（真如品）の中に挿入されている議論であり⁽¹⁾、その内容はおおよそカマラシーラ（Kamalaśīla, 740–797 頃）の著書 *Madhyamakālaṃkārapañjikā*（『中観荘嚴論細注』）に沿う形で構成されている⁽²⁾。しかし、カマラシーラのそれはチベット語訳でしか伝承されていない。そのため、梵文テキストが現存しているハリバドラの AAA は、ジュニャーナガルバ（Jñānagarbha, 8 世紀頃）や *Madhyamakālaṃkāravṛtti*（『中観荘嚴論頌自注』）を著したシャーンタラクシタ（Śāntarakṣita, 725–784 頃）を含む、いわゆる「瑜伽行中観派」と呼ばれる学匠たちの思想や見解を解明することに、大いに役立つものである。

⁽¹⁾ AAA と、*Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*（『二万五千頌般若経』）、その注釈である *Abhisamayālaṃkāra*（『現観荘嚴論』）、*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*（『八千頌般若経』）との関係については、真野 [1975]、兵藤 [2000] などを参照。

⁽²⁾ Cf. 一郷 [2015: xiii–xiv].

当該箇所では、「諸存在は、一多の自性を欠くから、勝義としては無自性（空）である」という論証式について、「証因は不成立（asiddha）ではない」、「証因は矛盾（viruddha）ではない」、「証因は不確定（anaikāntika）ではない」などと論じることによって、離一多自性性が正しい証因であることを立証する。そして、最後にハリバドラが自身の見解を述べる。その中でも今回は、「証因は不成立ではない」と主張するため、主張命題の主題である諸存在の吟味を経て、証因の主題所属性を論じる箇所を中心に扱う。その諸存在の吟味に関しては、極微論が中心的な論題として取り上げられる。極微論については、仏教内外で盛んに議論されるが、ここではそれまでの主要な極微説が端的にまとめられている。

AAA を翻訳するにあたり、2017 年から 2018 年にかけて龍谷大学で研究会が開催された。そこでは、主に大学院生が下訳を準備し、他文献との関連箇所やチベット語との解釈の違いなどを整理したものを、桂紹隆氏を中心として、一郷正道氏・沖和史氏・五島清隆氏らを交えて検討するという形でテキストを読み進めていった。本稿はその研究成果の一部である。

先行研究

エディション

AAA の刊本として、以下の 3 本が存在する。

・Wogihara, Unrai ed. *Abhisamayālaṅkāra'ālokā Prajñāpāramitāvvyākhyā (Commentary on Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā) by Haribhadra, Together with the Text Commented on*, Tokyo: The Toyo Bunko Publications, 1932–1935.

Wogihara は、AAA の梵文テキストを作成するにあたって、S. Lévi が所持していた写本をローマナイズし書き写したもの（以下、MsP）と Calcutta Library 所蔵の写本コピー（以下、MsC）の 2 写本と蔵訳を基に校訂を行っている。また、同年の 1932 年に Tucci も AAA の梵文テキストを刊行しているが、Wogihara は Tucci 本には間違いが多くあることを指摘し、自身のエディションについても写本筆記者の誤表記のために、訂正すべき箇所が散見していることを認めている。エディションの途中からは、必要に応じて Tucci 本の読みを採用している。

・Vaidya, P. L. ed. *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā With Haribhadra's Commentary Called Āloka*, Darbhanga: Buddhist Sanskrit Texts 4, 1960.

Vaidya は、1960 年に Wogihara 本と Tucci 本を参照しつつ、梵文テキストを刊行している。写本については詳しく言及していない。また Vaidya 自身は、Wogihara 本が Tucci 本よりも評価できると指摘している。

・Tucci, Giuseppe ed. *The Abhisamayālaṅkāraloka of Haribhadra: being a commentary on the Abhisamayālaṅkāra of Maitreya-nātha and the Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā*, Gaekwad's Oriental Series No. XLII, Baroda, 1932.

Tucci は、Wogihara 本と同年の 1932 年に、以下の写本を参照し、梵文テキストを刊行している。

(1) The Asiatic Society of Bengal のネパール写本（以下、MsA）

- (2) S. Lévi から譲り受けた Durbar Library の写本コピー (以下, MsB)
 (3) 上記の (2) とは別の, Durbar Library 所蔵の写本

先行訳

AAA の離一多自性論証に関しては、以下の 2 つの翻訳がある。

・Moriyama Seitetsu “The Yogācāra-mādhyamika Refutation of the Position of the Satyākāra and Alikākāra-vādins of the Yogācāra School, Part 1: A Translation of Portions of Haribhadra’s Abhisamayālaṃkāraḥ Prajñāpāramitāvyaḥyā,” 『佛教大学大学院紀要』 12, pp. 1–58, 1984.

・一郷正道 『ハリバドラの伝える瑜伽行中観派思想』, 東本願寺出版, 2015.

これらは、既刊校訂本をすべて参照しておらず、また翻訳や解釈にも少なからず改善すべき点が見られる。

凡例

以下では、AAA の梵文テキストを再校訂し、シノプシスに従って和訳と対照させて見開きの形で提示する。梵文校訂テキストは、Wogihara 本を底本として、適宜 Tucci 本及び Vaidya 本を参照し、最良と思われる読みを採用した。その際、Wogihara 本が脚注で言及している写本 (MsP, MsC) と Tucci 本が Appendix で言及している写本 (MsA, MsB) の異読については、それぞれを転載する形で適宜提示した。梵文テキストにおいて、分節記号の有無や連声規則の標準化、avagraha などの異読は逐一注記しなかった。

また、便宜上、AAA とパラレルの箇所があるもの (主に MAV や MAP, TSP など) は左頁の脚注部分にその梵文テキスト乃至は蔵文テキストを記載し、右頁の脚注部分に、MA 及び MAV の翻訳のみを一郷 [1985] を転載する形で配置した。

蔵訳も参照し、Wogihara 本と Tucci 本が異読として提示しているものをそれぞれ転載した。蔵文テキストについては、デルゲ版及び北京版のロケーションのみを示した。

和訳において、文脈上訳者が補った文言については [] で示し、訳者による言い換えや原語を挿入する場合は () で示した。

《シノプシス》

本稿で扱った箇所のシノプシスを以下に提示する。尚、それぞれの論証式には順に番号を付し、シノプシス中に記した。

0. 【論証式 1】 諸存在は、一多の自性を欠くから、勝義としては無自性（空）である。
 1. 証因は不成立（asiddha）ではない。
 - 1.1. 「存在」とは何か。目的を実現するものである。
 - 1.2. 存在は所知のものと能知のものとの二種である。
 - 1.2.1. 所知の存在—極微論の吟味
 - 1.2.1.1. Vaiśeṣika の極微論批判（avayavin 論批判）
 - 1.2.1.2. Vaibhāṣika の極微論批判【論証式 2】
 - 1.2.1.3. Sautrāntika の極微論批判
 - 1.2.1.4. Śubhagupta の極微論批判
- [小結論：所知の存在（＝外界対象）は一でもなく、多でもない.]

0. <prayoga 1>Entities ultimately have no intrinsic nature (i. e., are empty) because they are devoid of either one or many natures.

(W 624.5–7; V 457.32–458.2; T 372.4–8; D 227b2–3; P 279b6–8)⁽³⁾

ya ekānekasvabhāvā na bhavanti, na teṣāṃ paramārthataḥ svabhāvo 'sti, yathā māyādirūpasya.

na⁽⁴⁾ bhavanti caikānekasvabhāvāḥ⁽⁵⁾ svaparoditā bhāvā
iti vyāpakānupalabdhyā māyopamas tathāgata ity arthaḥ.

⁽³⁾MA k.1:

bdag dang gzhan smra'i dngos 'di dag //
yang dag tu na gcig pa dang //
du ma'i rang bzhin bral ba'i phyir //
rang bzhin med de gzugs brnyan bzhin //

BCAP 173.17–18 (=MA k. 1): niḥsvabhāvā amī bhāvās tattvataḥ svaparoditāḥ / ekānekasvabhāvena viyogāt pratibimbavat // Cf. Blumenthal [2009: 52].

MAP 23.3–7: gang dag gcig dang du ma'i rang bzhin ma yin pa de dag ni don dam par na rang bzhin med de / dper na gzugs brnyan bzhin no // bdag dang gzhan gyis smras pa'i dngos po rnams kyang gcig dang du ma'i rang bzhin ma yin pas zhes bya ba ni khyab par byed pa mi dmigs pa yin te /

TSP 671.12–14, Saccone [2018: 156.9–12]: prayogaḥ — yad ekānekasvabhāvaṃ na bhavati na tat sattvena grāhyaṃ prekṣāvātā yathā vyomotpalam. ekānekasvabhāvarahitāś ca parābhimatāḥ pṛthivyādaya iti vyāpakānupalabdhiḥ.

TSP 677.14–16, Saccone [2018: 166.19–21]: prayogaḥ — yad ekānekasvabhāvarahitaṃ tad asad-vyavahārayogyam, yathā viyadabjam. ekānekasvabhāvarahitāś ca parābhimatāḥ paramāṇava iti svabhāvahetuḥ.

⁽⁴⁾māyādirūpasya. na V: māyādirūpasya na. W, māyādirūpasya na T.

⁽⁵⁾°svabhāvāḥ W, V, T: °svabhāva MsP.

0. 【論証式 1】 諸存在は、一多の自性を欠くから、勝義としては無自性（空）である。

【論証式 1】

【遍充関係】 およそ一多の自性を持たないものには、勝義としては自性がない。たとえば、幻などにおける色形の如し⁽⁶⁾。

【主題所属性】 そして、自派・他派が主張する諸存在は、一多の自性を持たない。

【結論】 従って、自派・他派が主張する諸存在は、勝義としては自性を持たない。⁽⁷⁾

以上は、能遍の非認識 (vyāpakānupalabdhi) [による論証式であり、それ] に基づいて、「如来は幻の如し」という意味 [が導出される]⁽⁸⁾。

⁽⁶⁾この喩例の中の“rūpa”の解釈に関しては、MAV に引用される LAS で、鏡の中に見られる“rūpa”が言及されており、当該の AAA の文脈とも一致することから、LAS と同様に「色形」と解釈するべきであろう。尚、MAV 及び LAS の anyatva について、MAP は多性 (du ma nyid) と解釈する。

MAV 194.6–11: lang kar gshegs pa'i mdo las kyang /
gcig dang gzhan nyid spangs pa yi // gzugs ni ji ltar me long la //
snang yang de na yod ma yin // de bzhin dngos po'i ngo bo nyid //
ces bstan to /

一郷 [1985: 159.24–27]: 『入楞伽經』にも説かれている。

同一性と別異性とが否定された形が、鏡の中に見られるが、[それは] そこに実在するものではないように、[一切の] 存在のありかたも、同様 [に、実在しないもの] である。

MAP 195.21–22: gzhan pa nyid dang gcig pa nyid ni bltos par lta bar byed pa yin pas gcig pa nyid dang
du ma nyid dag gis spangs pa zhes bya ba'i tha tshig go //

LAS X k. 709:

yathā hi darpaṇe rūpam ekatvānyatvavarjitaṃ /
dṛśyate na ca tan nāsti tathā cotpādalakṣaṇam //

⁽⁷⁾論証式の各構成要素を列挙すれば、以下の通りとなる。

<sādhyadharmin>: svaparoditā bhāvāḥ

<hetu>: ekānekasvabhāvarahitā

<sādhyadharma>: paramārthataḥ niḥsvabhāvatā

<vyāpakānupalabdhi における vyāpaka>: ekānekasvabhāvatā

<vyāpakānupalabdhi における vyāpya>: sasvabhāvatā=sattva=arthakriyāyogya

⁽⁸⁾MA k.1, 一郷 [1985: 120.1–3]:

(宗) 自派、他派が説くこれらのものは、真実としては、無自性である。

(因) 一・多の自性を欠くゆえに。

(喩) 影像の如し。

また、桂 [1969: 27] は、下記の PV が、TBh での中観派の立場から唯心論を批判する箇所て引用され、上記の MA k. 1 と密接な関係にあることを指摘する。

PV III k. 359:

bhāvā yena nirūpyante tadrūpaṃ nāsti tattvataḥ /
yasmād ekam anekaṃ vā rūpaṃ teṣāṃ na vidyate //

TBh 70.6–9: kīrtipādair apy uktam —

bhāvā yena nirūpyante tadrūpaṃ nāsti tattvataḥ /
yasmād ekam anekaṃ vā rūpaṃ teṣu na vidyate //

更に、AAA での離一多自性論証とそれに続く極微説批判に関しては、TSP の bahirarthaparīkṣā にそのパラレルがある。それについては、菅沼 [1981] [1985]、神子上 [1997]、Saccone [2018] を随時参照した。

1. The logical reason is not unestablished (*asiddha*).

(W 624.7; V 458.2; T 372.8; D 227b3; P 279b8)⁽⁹⁾
nāsiddho 'yaṃ hetuḥ⁽⁰⁾.

1.1. What is an “Entity”? That which effects a purposeful action.

(W 624.8–10; V 458.2–4; T 372.8–11; D 227b3–4; P 279b8–280a2)⁽¹¹⁾
yasmāt prekṣāvātām pravṛtṭeḥ prayoṇavattayā vyāptatvāt arthakriyā⁽¹²⁾-yogyā⁽¹³⁾-
padārthaviṣayo vicārah⁽¹⁴⁾. anyathārthakriyārthinām puṃsām asadarthapadārthavicāraiḥ
kiṃ prayoṇam ity arthakriyākārī bhāvo 'bhyupagantavyaḥ.

1.2. Entity is either *jñeyarūpa* or *jñānarūpa*.

(W 624.11–12; V 458.4–5; T 372.11–13; D 227b4–5; P 280a2)
sa cānyonyavyavacchedarūpatvāj jñeyarūpo vā⁽¹⁵⁾ bhavej⁽¹⁶⁾ jñānarūpo veti vikalpaḥ.

⁽⁹⁾MAV 26.14: gtan tshigs 'di ma grub po snyam du ma sems shig /

⁽⁰⁾nāsiddho 'yaṃ hetuḥ W, V, T: nāsti siddho hetuḥ MsP, MsC.

⁽¹¹⁾MAV 38.11–40.5: 'di dag thams cad ni bdag gyis rloṃs te smras su zad kyi / don bya ba thams cad kyi
nus pa dang bral ba la ni rtog pa dang ldan pa rnam kyis rnam par dpyad pa'i don ci yang med de /
don bya bar nus pa rnam par brtag pa'i yul yin pa'i phyir ro // gzhan du na

don byed nus pa ma yin la // de 'dod brtags pas ci zhig bya //

ma ning gzugs bzang mi bzang zhes // 'dod ldan rnam kyis brtags ci phan // (k. 8)

de bas na mkhas pa rnam ni don byed nus pa la dngos po'i mtshan nyid ces smra'o //

MAP 41.1–4: gzhan du na zhes bya ba ni gal te don byed par rung ba'i yul dpyad par mi 'dod na de'i
tshe don byed pa don du gnyer ba'i skyes bu rnam la / dngos po don med par dpyad pa dag ci dgos shes
brjod par bya ba ste / rtog pa dang ldan pa'i 'jug pa ni dgos pa dang ldan pas khyab pa'i phyir ro //

PV I k. 211 (= TSP 191.12–13):

arthakriyāsamarthasya vicāraiḥ kiṃ tadarthinām /

ṣaṅghasya rūpavairūpye kāminyāḥ kiṃ parikṣayā //

NB I k. 15: arthakriyāsamarthyalakṣaṇatvād vastunaḥ //

⁽¹²⁾arthakriyā° V, T, MsP, MsC: paramārtha° W, don dam par Tib..

⁽¹³⁾°yogyā° W, V, T: °yogye MsP.

⁽¹⁴⁾vicārah V, MsP, MsC: vicāryaḥ W, T, rnam par dpyad bya'i Tib..

⁽¹⁵⁾vā W, V, T: om. MsP.

⁽¹⁶⁾bhavej W, V, T: bhāve MsP, bhav MsC, 'gyur grang Tib..

1. 証因は不成立 (asiddha) ではない。

この証因（一多の自性を持たないこと）は不成立 (asiddha) ではない¹⁷⁾。

1.1. 「存在」とは何か。目的を実現するものである。

それは以下の理由による。思慮ある人々の活動の開始は、有目的性 (prayojanavattā) によって遍充されているから、吟味検討は目的実現が可能なもの (arthakriyāyogyapadārtha, = 存在)¹⁸⁾を対象とするものである。そうでなければ、目的実現を追求する人々にとって、目的を持たないもの (asadarthapadārtha, = 非存在) を吟味検討することに何の用があるのか。従って、存在 (bhāva) は目的を実現するもの (arthakriyākārin) として認められなければならない¹⁹⁾。

1.2. 存在は所知のものと能知のものとの二種である。

そして、その [存在] は、所知のもの (jñeyarūpa) か、能知のもの (jñānarūpa) かの、いずれかでなければならない。何故ならば、[所知と能知とは、] 相互に排除しあうものだからである。

¹⁷⁾MAV 26.14, 一郷 [1985: 120.15–16]: 「一・多の自性を欠くゆえに」という] この証因が不成の誤謬になると考えてはならない。

¹⁸⁾ダルマキールティにおける arthakriyā に二義があることについては, Nagatomi [1967/68], 神子上 [1978], 桂 [1983], Dunne [2004] を参照。

¹⁹⁾MAV 38.11–40.5, 一郷 [1985: 123.17–25]: これら [無為法をはじめ常住性批判の] すべてを自分は得々と述べてきたが, [無為法をはじめ] 効果的作用能力 (arthakriyāśakti) を欠いたものはいかなるものも, 思慮深い人々なら検討する必要はまったくない。なんとすれば効果的作用能力 [をもつものだけ] が検討の対象であるから。別な表現をもって [ダルマキールティによって言われている]。

それ (効果的作用) を求める人々が効果的作用能力を欠いたものを検討して, なんの役に立つであろうか。好きな女たちが, 性的不能者 (śaṅḍha) を美しい, 美しくないと品定めしてなにならうか。(第8偈) したがって, 賢者たちは「存在の定義は効果的作用能力にある」と語る。

1.2.1. Entity as *jñeyarūpa*: the examination of atomic theories.

(W 624.13–15; V 458.5–7; T 372.13–16; D 227b5–6; P 280a2–4)

tatra yady ādyaḥ pakṣas tadā parasparasamṣyuktasvabhāvo vā bhavet, bahubhir vā⁽²⁰⁾ samānajātīyaḥ paramāṇubhiḥ parasparasāmārthyavidhṛtair asamāśliṣṭasvarūpaiḥ sāntaraiḥ parivṛtaḥ⁽²¹⁾, yadvā nirantarair iti pakṣatrayam.⁽²²⁾

⁽²⁰⁾vā W, V, T: bhā MsP.

⁽²¹⁾parivṛtaḥ W, V, T: parivṛttaḥ MsP, MsC.

⁽²²⁾MAV 50.4–52.12: 'on kyang gang thog mar de rtsom pa'am / rags pa gdags pa'i rgyu rdul phra rab don dam pa gcig pu'i rang bzhin du 'gyur ro // de yang de ltar 'gyur bar mi rigs te / de yang (1) 'byar bar 'gyur na ni ji ltar gzegs zan pa dag na re / phrad de 'tshogs nas dgos pa rtsom mo zhes zer ba lta bu'am / (2) yang na phan tshun mthus rnam par 'dzin gyis ma 'byar ba'i rang bzhin bar yod cing bskor ba ste / ci ltar kha cig na re / tha dad phyogs nas mang po dag // 'ga' la kun nas bskor tsam du // brjod par zad kyi rdul de ni //r cha shas bcas pa'i bdag nyid min // zhes zer ba la bu'am / (3) yang na mang po dag bar med de / ji ltar rdul phra rab rnams mi reg kyang bar med pas reg par 'du shes so zhes bya ba lta bu la yang mi rung ste / rnam par bzhag pa 'di dag thams cad ni brtags pa tsam kho na'i snying por zad do //

MAP 51.1–53.19: re zhig de ltar rags pa rnams la rang bzhin gcig pa nyid bsal ba yin no // da ni rdul phra rab rnams la yang bsal ba'i phyir / 'on kyang gang thog mar de rtsom pa'am zhes bya ba la sogs pa smos so // thog mar de rtsom pa zhes bya ba ni ji ltar bye brag pa rnams kysis yongs su brtags pa lta bu ston par byed pa ste / de dag ni rdul phra rab gnyis pa la sogs pa rags pa'i rdzas dang po rtsom par byed pa ni rdul phra rab rnams kho na yin par 'dod do // rags pa gdags pa'i rgyu zhes bya ba ni mdo sde pa'i lugs su bshad pa ste / de dag ni rags pa gdags pa'i rgyu rdul phra rab rnams de ltar gnas pa 'ba' zhig tu zad kyi rdzas gzhan ni med do zhes brjod do // (1) de la kha cig na re rdul phra rab rnams phan tshun reg go zhes zer ro // (2) gzhan dag na re rigs mthun pa mang pos bskor ba rnams ni bar dang bcas pa kho na yin la / rags par 'khrul pa'i rgyu mtshan yin no zhes zer te / dper na slob dpon dge bsrungs kysis / gang la phyogs cha tha dad yod // de ni gcig pu mi rung ngo // zhes bya ba 'di sun dbyung ba'i bsam pas / tha dad phyogs nas mang po dag // 'ga' la kun nas bskor tsam du // brjod par zad kyi rdul de ni // cha shas bcas pa'i bdag nyid min // zhes bshad pa lta bu'o // 'di'i don ni 'di yin te / tha dad phyogs nas shes bya ba'i gtan tshigs 'dis ni rdul phra rab mang po rnams kysis yongs su bskor ba tsam du brjod par 'gyur gyi / yan lag dang bcas pa ni ma yin no zhes bya bar zad de / 'dir yang bar dang bcas pa dag kho nar gnas so zhes de snyam du bsams nas smras pa yin no // (3) gzhan dag na re reg pa yang ma yin la bar dang bcas pa dag kyang ma yin mod kyi / 'dab chags pa kho nar gnas so zhes zer te / ji skad du btsun pa na re rdul rnams mi reg kyang bar med pas reg par 'du shes so zhes zer ba lta bu'o //

TSP 677.20–21, Saccone [2018: 167.6–8]: tatra kecid āhuḥ — parasparaṃ samṣyujyante paramāṇava iti. sāntarā eva nityaṃ na spr̥ṣantūty apare. nirantaratve tu spr̥ṣtasamjñety anye.

VimśV 6.25–7.2, Silk [2016: 193.17–25]:

na tad ekaṃ na cānekaṃ viśayaḥ paramāṇuśaḥ /

na ca te samḥatā yasmāt paramāṇur na sidhyati // (k.11)

iti. kim uktaṃ bhavati. yat tad rūpādikam āyatanam rūpādivijñaptinām pratyekaṃ viśayaḥ syāt tad ekaṃ vā syād yathāvayavirūpaṃ kalpyate vaiśeṣikāiḥ. anekaṃ vā paramāṇuśaḥ. samḥatā vā ta eva paramāṇavaḥ. na tāvad ekaṃ viśayo bhavaty avayavebhyo 'nyasyāvayavirūpasya kvacid apy agrahaṇāt. nāpy anekaṃ paramāṇūnām pratyekaṃ agrahaṇāt. nāpi te samḥatā viśayibhavanti. yasmāt paramāṇur ekaṃ dravyaṃ na sidhyati.

1.2.1. 所知の存在—極微論の吟味

そのうち、もし [存在が所知のものであるという] 最初の立場であるならば、[存在は、] (1) [諸々の極微が] 相互に結合したもの (= *avayavin*) であるか、(2) [中心に位置している極微が] 相互に [因果] 効力によって保持され、緊密にくっつき合わない、間隙を伴う、多くの同種の極微によって、包囲されているものであるか、あるいは (3) 間隙を伴わない [多くの同種の極微] によって [包囲されているものであるか] のいずれかであるという三つの立場²³⁾がある²⁴⁾。

²³⁾岩田 [1997] [1999] [2011] では、*Sthitisamāsa* において取り上げられる各学派の伝統的な極微説を *AKBh* や *Vimś* などに遡りながら検討している。

²⁴⁾MAV 50.4–52.12, 一郷 [1985: 126.15–127.4]: さらにまた、最初にそれ [粗大な実体 (*dravya*)] を構成したり、あるいは、粗大なものを仮説する根拠であったりする究極的な極微が、一を自性とするということも、同様ありえない。それも、(1) 結合する、とすれば、カナダ (*Kaṇāda*) たちが、

触れ合って一全体となって目的物 (*prayojana*) を構成する

と語る如きものであるのか、あるいは (2) 相互に効力で保持され、結合しない性質をもち、間隙 (*antara*) を有し、[多くの同種類の極微によって] 囲まれている、とすれば、ある人シュッバグプタが、

さまざまな方位をもって、多く [の極微] が或る [極微] を囲んでいることを語るにすぎないのであって、その極微自体が部分を有するものではない。

と語る如きものであるのか、あるいはまた、(3) 多くのものが間隙をもたずにある、とすれば、

極微は相触れないが、間隙がないから相触れられたというのである。

と語られる如きものか、のいずれの説であっても不合理である。これらすべての定説の核心は、ただ妄想にすぎない。

1.2.1.1. Criticism of Vaiśeṣika theory of atoms (criticism of *avayavin*).

(W 624.16–26; V 458.7–14; T 372.16–373.2; D 227b6–228a3; P 280a4–b2)

tatra prathame pakṣe yady ekena sahaikadeśena saṃyogo 'parasya tadā sāvayavatvaprasaṅgād ekatvahāniḥ⁽²⁵⁾, aparāparasvabhāvair aṅvantarasamāśleṣāt.

sarvātmanā saṃyogapakṣe 'pi yadā⁽²⁶⁾ pūrvo 'ṅur apareṇāṅunā⁽²⁷⁾ saha sarvātmanā saṃyujyate tadāparo 'pi pūrveṇety ataḥ saṃyogasyobhayapadārthādhīnatvena parasparasvabhāvānupraveśān na kasyacid aṅor ekasvabhāvātā.

tathā hi pūrvo 'ṅur apareṇa sarvātmanā saṃyujyata iti svasvabhāvaṃ parityajya sarvathāpararūpāpattes⁽²⁸⁾ tasya⁽²⁹⁾ saṃyujyamānasyāsattvam. tathāparo 'pi pūrveṇa saṃyujyata iti svasvabhāvaṃ vihāya sarvathā pūrvarūpabhavanāt⁽³⁰⁾ tasya saṃyogāśrayasyāsattvam. tataś caikasyaikadā⁽³¹⁾ parasparaparīhārasthitalakṣaṇavidhipratiśedhāyogāt⁽³²⁾ katham ekasvabhāvātā.⁽³³⁾

⁽²⁵⁾ ekatva° W, V, T: eka° MsC.

⁽²⁶⁾ yadā W, V, T: yadā ca MsC.

⁽²⁷⁾ apareṇāṅunā W: aparāṅunā V, T.

⁽²⁸⁾ °āpattes W, V, T: °āpattis MsC.

⁽²⁹⁾ tasya MsP: tasya ca W, V, T.

⁽³⁰⁾ °bhavanāt W, V, T: °svabhāvātāt MsC.

⁽³¹⁾ caikasyaikadā W, V, T: caikadā MsC.

⁽³²⁾ °parihāra° W, V, T: °vihāra° MsC.

⁽³³⁾ MAV 54.1–5: (1) a) bdag nyid thams cad kyis 'byar na ni rdzas rnams 'dres par 'gyur te / rdul gyi rang bzhin gcig pu gang gis 'byar ba de nyid gzhan dang yang 'byar ba'i phyir ro // b) phyogs gcig gis 'byar na ni cha shas yod par 'gyur te / rang bzhin gzhan dang gzhan dag gis rdul gzhan dang 'byar ba'i phyir ro //

MAP 55.1–10: (1) de la phyogs dang po ltar na a) bdag nyid thams cad kyis 'byar na ni thams cad kyī rang bzhin phan tshun rjes su zhugs pa'i phyir gong bu rdul phra rab gcig tsam du 'gyur ro // bdag nyid thams cad kyis shes bya ba ni rdul phra rab kyī rang bzhin ci 'dra ba de khyab nas zhes bya ba'i tha tshig go // b) phyogs gcig gis zhes bya ba ni rang bzhin ma khyab nas shes bya ba'i tha tshig go // des ni snang byed kyī rdul phra rab ni rang bzhin gcig pa yin pas thams cad ces bya ba dang phyogs gcig ces bya ba'i sgra mi 'thad de / thams cad dang phyogs gcig ni yul tha dad pa'i phyir ro zhes gang smras pa de bsal ba yin no //

MAV 56.17–21: (1) gal te phyogs lhag ma na rnam par gnas pa'i rdul phra rab rnams la bltas pa yang yin na ni de'i tshe de'i rang bzhin la bltas pa nyid kyī phyir shar phyogs na gnas par 'dod pa'i rdul phra mo lta bu'am / shar phyogs kyī khang pa khang pa gcig la bltas pa lta bur phyogs lhag ma gzhan na gnas pa rnams don ji lta ba bzhin mi 'gyur ro //

MAP 57.10–59.6: (1) de la phyogs dang po ltar na bskor ba'i rdul phra rab thams cad phyogs gcig pa nyid du thal bar 'gyur te / de'i rang bzhin la bltas pa nyid kyī phyir ro // rdul phra mo gang la rang bzhin de gcig yod pa de ni de'i rang bzhin yin la rdul phra mo gang la de'i rang bzhin gyī rdul phra mo la bltas pa yod pa zhes tshig rnam par sbyar te de'i dngos po ni de nyid do // sbyor ba ni rdul phra rab kyī ngo bo gcig la bltas pa'i rang bzhin gang yin pa de ni phyogs gcig pa can yin te / dper na dbus na gnas pa'i rdul phra rab de nyid kyī shar phyogs na gnas pa'i rdul phra rab lta bu'am / shar phyogs kyī khang pa khang pa gcig la bltas pa lta bu ste / bskor ba'i rdul phra rab thams cad kyang rdul phra rab gcig la bltas pa'i rang bzhin yin pas zhes bya ba ni rang bzhin gyī gtan tshigs so //

1.2.1.1. Vaiśeṣika の極微論批判 (avayavin 論批判)

そのうち、第一の立場の場合、(1)-1 もしある [極微] が他の [極微] と一箇所で結合する [という主張] ならば、[単一の極微が] 部分を有する (sāvayavatva) という過失が付随するので、[その] 一性 (ekatva) が否定される。[何故ならば、極微は] それぞれ異なる自性 (aparāparasvabhāva) を伴って別の [極] 微と緊密にくっつきあうからである。

(1)-2 [極微] 全体で結合するという主張でも、東の [極] 微が西の [極] 微と全体で結合する場合、西の [極微] も東の [極微] と [全体で結合することになる]。この故に、[両者の全体的] 結合は二つのものに依存するので、[二つの極微に] 相互の自性 (parasparasvabhāva) が入り込むから、いかなる [極] 微も単一の自性を持つこと (ekasvabhāvata) はない [ことになってしまう]。

すなわち、東の [極] 微が西の [極微] と全体で結合するのであるから、自らの自性を放棄して完全に西の [極微] そのものになってしまうから、現に結合しているそれ (東の極微) は存在しない [ことになってしまう]。同様に、西の [極微] も東の [極微] と [全体で] 結合するのであるから、自らの自性を捨てて完全に東の [極微] そのものになるから、結合の依り所であるその [西の極微] は存在しない [ことになってしまう]。

そしてそれ故に、一つのものには、相互に排除することによって存立することを特徴とする (parasparaparihārasthitalakṣaṇa)⁶⁴ 肯定と否定 (vidhi-pratiṣedha) が、同時にはありえないから⁶⁵、どうして単一の自性を持つことがありえようか [、いやありえない]⁶⁶。

VimśV 7.19–21, Silk [2016: 194.22–24]:

digbhāgabhedo yasyāsti tasyaikatvan na yujyate / (k.14ab)

anyo hi paramāṇoḥ pūrvadigbhāgo yāvad adhodigbhāga iti digbhāgabhedo sati katham tadātmakasya paramāṇor ekatvaṃ yokṣyate.

AKBh 32.11–13: kiṃ punaḥ paramāṇavaḥ spṛśanty anyonyam āhosvin na. na spṛśantīti kāśmīrakāḥ. kiṃ kāraṇam. yadi tāvat sarvātmanā spṛśeyur miśrībhaveyur dravyāṇi. athaikadeśena sāvayavāḥ prasajyeran. niravayavāś ca paramāṇavaḥ.

⁶⁴Cf. Kyuma [1997], [1999].

⁶⁵この直前の文章では、西の極微がなくなって東の極微しかなくなってしまう、同様に、西の極微しかなくなり、東の極微が存在しないことになってしまうことが説かれる。ここでの肯定と否定とは、東の極微の存在性と非存在、あるいは西の極微の存在性と非存在性を意味し、それが同時にはありえないことが指摘されている。

⁶⁶MAV 54.1–5, 一郷 [1985: 127.5–11]: (1) a) [極微が] 全体で [他の極微に] 結合するとすれば、諸の [極微の] 実体が交わりあって [一つになって] しまうであろう。なぜなら、極微全体で、或る [極微] と結合しているが、その同じ全体をもってさらに別の極微とも結合するから。b) [極微が] 一部で [他の極微に] 結合するとすれば、[極微は] 部分を有するものになってしまう。なぜなら、さまざまな部分が他の極微と結合するから。

MAV 56.17–21, 一郷 [1985: 128.3–7]: (1) もしも、その余の方角に位置する諸極微とも向かいあうならば、その場合、その同じ全体をもって向かいあっているから、たとえば東側に位置するといわれる極微とか、一つの宮殿に向かいあう東の宮殿といった如き、余他 [の極微] が、字義通り、他の方角に位置するということがなくなってしまう。それゆえ、「東」「西」といった方位が存在しないから、大地等は存在しないであろう。

1.2.1.2. Criticism of Vaibhāṣika theory of atoms <prayoga 2 >.

(W 624.27–625.20; V 458.14–29; T 373.2–24; D 228a3–b4; P 280b2–281a6)

dvitīye 'pi parivāraḥpakṣe⁽³⁷⁾ yadi nāma samānajātīyaiḥ saṃsparśo neṣṭas tathāpi chidrasyālokatamorūpatvād⁽³⁸⁾ vijātīyair ālokatamaḥparamāṇubhir abhīṣṭa eva.⁽³⁹⁾ na hy ālokenāsamākrāntasya tamorahitatā tamasā vānāspadīkṛtasyālokarahitavṇam yuktimat tayor anyonyavirahitadesādīmātrapatibaddhodayatvāt. tathā cānantaropavarṇitadoṣaḥ⁽⁴⁰⁾ samupanipatati.

atha vijātīyair api saṃsparśo nānumanyate, tadā yo 'sau madhyavartī paramāṇur yenaikena svabhāvenaikaparamāṇvabhimukhāvasthitas tenaivānyaparamāṇvabhimukho yadvānyeneti vikalpadvayam.

⁽³⁷⁾ dvitīye 'pi parivāraḥpakṣe W, V, T: dvitīyaparivāraḥpakṣe MsC.

⁽³⁸⁾ tathāpi chidra° W, V, T: tathā paricchidra° MsC.

⁽³⁹⁾ AKBh 18.12–16:

chidram ākāśadhātuvākhyam

chidram ity ucyamānaṃ kiṃ veditavyam.

ālokatamaṣī kila /

na hi chidram ālokatamobhyām anyat gṛhyate. tasmāt kilākāśadhātur ālokatamaḥ svabhāvo rātriṃdivasvabhāvo veditavyaḥ.

MAV 54.6–8: (2) bar yod pa yang bar dag tu snang ba dang mun pa'i rdul phra rab rnamṣ kyī go skabs yod par 'gyur te / phrag ni mun pa dang snang ba'i bdag nyid yin pa'i phyir de dag dang 'byar bar 'gyur ro //

⁽⁴⁰⁾ varṇitadoṣaḥ W: °varṇito doṣaḥ V, T.

1.2.1.2. Vaibhāṣika の極微論批判【論証式2】

[中心に位置している極微は、多くの同種の極微によって間隙を伴って] 包囲されているという第二の場合についても、(a) たとえ諸々の同種 [の極微] との接触は認められないとしても、そうであっても、[極微と極微の間の] 間隙は明もしくは暗を本質とするから、異種類の明もしくは暗の諸極微と [の接触] がかならず予想される⁽⁴¹⁾。というのも、明によって覆われていないものが暗を持たないこと、あるいは、暗によって占有されていないものが明を持たないことは不合理だからである。その両者(明と暗)の生起は、相互に相手を欠く場所等だけに制限されているからである。かくして、直前に説かれた誤謬になってしまう。

あるいは、(b) 諸々の異種類 [の極微] との接触もまた認められないならば、中心に位置する極微が、ある一つの自性でもって、一つの極微と向き合って位置する場合、[その中心の極微は、] (b1) その同じ [自性] でもって他の極微と向き合っているのか、あるいは、(b2) 別の [自性] でもって [他の極微と向き合っている] のかという二つの選択肢がある。

⁽⁴¹⁾ MAV 54.6–8, 一郷 [1985: 127.12–15]: (2) 間隙があつて [結合することがないという第二の主張で] も、間隙は、明の極微、闇の極微になる機会があるであろう。空隙(中間処)は、闇と明をその性質とするから、それら [空隙の明と闇] と [余の極微とが] 結合することになろう。

tatra yady ādyaḥ pakṣas tadā

yad ekarūpaparamāṇvabhīmukhasvabhāvaṃ tad ekadeśam. tadyathā tasyaiva paramāṇoḥ pūrvadigavasthitaparamāṇuḥ.

ekaparamāṇvabhīmukhasvabhāvās ca sarve parivārakāḥ paramāṇava iti svabhāvahetuḥ.⁽⁴²⁾ tenaiva svabhāvenety abhyupagamān⁽⁴³⁾ nāsiddhatā. sapakṣe bhāvān⁽⁴⁴⁾ na viruddhatā. bhinnadeśāvasthāne tu nābhīmaitaika⁽⁴⁵⁾-paramāṇv⁽⁴⁶⁾-abhīmukhasvabhāvā bhaveyus tasya paramāṇor aparāparasvabhāvābhāvāt. asatā ca svabhāvenābhīmukhyāyogād iti na cānaikāntikatā hetoḥ.⁽⁴⁷⁾

tataś ca parivāryāvasthānābhāvena parivārakāṇām aṇūnām ekadeśatāprasaṅgāt⁽⁴⁸⁾ tattvataḥ pracayābhāve⁽⁴⁹⁾ tatsādhyārthakriyāvaikalayād eva tasya paramāṇor naikasvabhāvābhyupagamō yuktaḥ.

dvitīye tu pakṣe 'parāparasvabhāvair aparāparaparamāṇvabhīmukhayogāt sphuṭatara eva svāyavatāprasaṅgād ekatvaviraho 'ṇūnām⁽⁵⁰⁾ svabhāvabhedalakṣaṇatvād vastubhedasya.

⁽⁴²⁾MAP 59.1–6: sbyor ba ni rdul phra rab kyi ngo bo gcig la bltas pa'i rang bzhin gang yin pa de ni phyogs gcig pa can yin te / dper na dbus na gnas pa'i rdul phra rab de nyid kyi shar phyogs na gnas pa'i rdul phra rab lta bu 'am / shar phyogs kyi khang pa khang pa gcig la bltas pa lta bu ste / bskor ba'i rdul phra rab thams cad kyang rdul phra rab gcig la bltas pa'i rang bzhin yin pas zhes bya ba ni rang bzhin gyi gtan tshigs so //

TSP 678.3–6, Saccone [2018: 167.15–19]: prayogaḥ — yad ekarūpaparamāṇvabhīmukhasvabhāvaṃ tad ekadeśam yathā tasyaiva pūrvadeśasthitaḥ paramāṇur ekaprāsādābhīmukhapūrvaprasādavad vā. ekarūpaparamāṇvabhīmukha-svabhāvās ca sarve parivāryāvasthitāḥ paramāṇava iti svabhāvahetuḥ.

⁽⁴³⁾svabhāvenety abhyupagamān W, V, T: svabhāvena bhyuttamagamān MsC.

⁽⁴⁴⁾bhāvān W: saddbhāvān V, T.

⁽⁴⁵⁾nābhīmaitaika° W, V, T: nābhīmaitaika° MsP.

⁽⁴⁶⁾°paramāṇv° W, V, T: °parivāraṇv° MsC.

⁽⁴⁷⁾MAP 59.7–10: phyogs tha dad pa na gnas pa yin na ni mngon par 'dod pa'i rdul phra rab gcig pu la bltas pa'i rang bzhin dag tu mi 'gyur te / rdul phra rab de la rang bzhin gzhan med pa'i phyir ro // rang bzhin med na bltas pa yang mi rung ba'i phyir gtan tshigs ma nges pa nyid ma yin no //

⁽⁴⁸⁾ViṃśV 7.24–8.1 Silk [2016: 194.29–195.4]: āvaraṇaṃ ca kathaṃ bhavati paramāṇoḥ paramāṇvantareṇa yadi digbhāgabhedo neṣyate. na hi kaścid api paramāṇoḥ parabhāgo 'sti yatrāgamanād anyenānyasya pratighātaḥ syāt. asati ca pratighāte sarveṣāṃ samānadeśatvāt sarvaḥ saṃghātaḥ paramāṇumātraḥ syād ity uktam.

⁽⁴⁹⁾TSP 677.23–678.3, Saccone [2018: 167.12–14]: tathā hi — yenaikarūpeṇaikāṇvabhīmukho madhyavartī paramāṇus tenaivāparaparamāṇvabhīmukho yadi syāt tadā parivārakāṇām aṇūnām ekadeśatvaprasaṅgāt pracayo na syāt.

MAP 59.10–11: de'i phyir yang dag par na bskor te gnas pa med pas rdul phra rab rnam rgyas par mi 'gyur ro //

⁽⁵⁰⁾MAP 59.12–13: phyogs gnyis pa ltar na yang yan lag dang bcas pa nyid du thal bar 'gyur bar gsal bar bdag gis rnam par ma phy'e'o //

TSP 677.6–7, ViṃśV 7.17–21, Silk [2016: 91.7–93.4]: yadi ca paramāṇoḥ saṃyoga iṣyate yadi vā neṣyate. digbhāgabhedo yasyāsti tasyaikatvan na yujyate / anyo hi paramāṇoḥ pūrvadigbhāgo yāvad adhodigbhāga iti digbhāgabhedo sati kathaṃ tadātmakasya paramāṇor ekatvaṃ yokṣyate.

そのうち、もし最初の立場 (b1) の場合は、

【論証式 2】⁶¹⁾

【遍充関係】 およそ一つの自性でもって [中心の] 極微と向き合うものは、同一の場所を占めるものである。たとえば、その同じ [中心の] 極微の東の方角に位置する極微が [東の方角の場所を占める] ように。

【主題所属性】 そして、[中心の極微を] 包囲しているすべての極微は、一つの [自性でもって、その中心の] 極微と向き合うものである。

【【結論】 [中心の極微を] 包囲しているすべての極微は、同一の場所を占めるものである。】

以上は自性因 (svabhāvahetu) [による論証式である]。[最初の立場では] 「その同じ自性でもって」という [言明によって証因の主題所属性を] 認めているから、[この証因は] 不成立ではない。[また、] 同類群に [証因が] 存在するから矛盾ではない。一方で、[包囲している諸極微が、それぞれ] 別の場所に位置するならば、[証因として] 承認されている、一つの [自性でもって、その中心の] 極微と向き合うものがなくなってしまう。その [中心の] 極微にはそれぞれ異なった自性は存在しないからである。そして、存在しない自性でもって [中心の極微がそれを包囲している諸極微と] 向き合うことは不合理だからである。従って、証因は不確定ではない。

そして、それ故 [諸極微が中心の極微を] 包囲して位置することがないので、包囲している諸 [極] 微が同一の場所を占めるものとなってしまうから、真実としては、[諸極微の] 集積 (= 中心の極微を包囲すること) がない [。そのような] とき、それ (諸極微の集積) によって成立させられるべき効果的作用が全く欠けるから、その [中心の] 極微が一つの自性を持つと認めることは不合理である。

一方で、[別の自性でもって他の極微と向き合うという] 第二の立場 (b2) では、それぞれ異なった自性でもって、それぞれ異なった極微と向き合うことは妥当であるから、部分を有するものとなってしまうので、諸 [極] 微が一性を欠いていることはより明瞭である。事物の相違は自性の相違に特徴づけられるからである⁶²⁾。

⁶¹⁾ <sādhyaḍharmin>: sarve parivārakāḥ paramāṇavaḥ
<hetu>: ekarūpaparamāṇvabhimukhasvabhāva
<sādhyaḍharma>: ekadeśa(svabhāva)
<sapakṣa>: ekadeśa(svabhāva)
<vipakṣa>: anyadeśa(svabhāva)

⁶²⁾ HB 22.2: svabhāvabhedalakṣaṇatvād bhāvabhedasya.
Cf. 吉水 [1999].

1.2.1.3. Criticism of Sautrāntika theory of atoms.

(W 625.21–23; V 458.29–31; T 373.24–374.2; D 228b4–5; P 281a6–7)

tr̥tīyas tu nairantaryapakṣaḥ saṃyogapakṣam evānupatati tatparyāyatvāt.⁵³⁾ na hy antarāladeśaviraḥṇāṃ parasparasamśleṣamuktānyā⁵⁴⁾ gatiḥ asti, na ca śabdāntareṇābhidhīyamānaḥ sa evārtho 'nyathā bhavaty atiprasaṅgāt.⁵⁵⁾

⁵³⁾MAV 56.1–3: (3) bar med pa'i phyogs kyang 'byar ba'i phyogs dang tha dad pa med pa nyid de / bar med pa ni phrag med pa'o // phrad pa dang 'byar ba zhes bya ba ni don tha dad pa ma yin te / MAP 57.1–2: (3) bar med pa'i phyogs kyang phrad pa'i phyogs kho na'i khongs su 'dus te / phrad pa'i rnam grangs yin pa'i phyir ro //

⁵⁴⁾°samśleṣamuktānyā W: °samśleṣam muktānyā V, T.

⁵⁵⁾MAP 57.2–4: bar gyi yul dang bral ba rnam la ni 'byar ba ma gtogs pa rnam pa gzhan med do // don de nyid sgra gzhan gyis brjod kyang gzhan du ni mi 'gyur ro //

1.2.1.3. Sautrāntika の極微論批判

一方、[中心の極微が] 間隙を伴わない [多くの同種の極微によって包囲されている] という第三の立場は、[諸々の極微が相互に] 結合しているという [第一の] 立場と全く同じになる。[間隙を伴わない (nairantarya) という語は] そ [の結合 (saṃyoga) という語] と同義語だからである⁶⁶⁾。というのも、介在する空間という場所を欠いている諸 [極微] には、相互に緊密にくっつきあうことを離れた、[結合とは] 別の状態はないからである。また、別の語で示されているからといって、その同じものが別のものになることはないからである。[そういうことがあれば、] 過大適用⁶⁷⁾になってしまうからである。

⁶⁶⁾ MAV 56.1–3, 一郷 [1985: 127.16–19] (3) 間隙がないという [第三の] 主張も、結合しているという [第一の] 主張と異なることはない。「間隙がない」(nirantara) とは、「空隙がない」ことである。「触れ合っている」(saṃyoga) と「結合している」(saṃśleṣa) とはシノニムである。

⁶⁷⁾ 「過大適用」(atiprasaṅga) の展開については、原田 [1988] に詳しい。

1.2.1.4. Criticism of Śubhagupta theory of atoms.

[Conclusion: Entity as *jñeyarūpa* (= external object) is neither one nor many.]

(W 625.24–626.7; V 458.31–459.10; T 374.2–16; D 228b5–229a3; P 281a7–b6)

athāsaṃyukta⁽⁵⁸⁾ eva⁽⁵⁹⁾ paramāṇur bahubhis tu dikśabdavācyaiḥ samīpataradeśāvasthitaiḥ⁽⁶⁰⁾
paramāṇubhiḥ parivṛta⁽⁶¹⁾ iti cen⁽⁶²⁾ matam. tad ayuktam. na hy arvākparabhāgayor abhāve
vacanam idam arthavattāyāṃ vyavatiṣṭhate.

tadanyāpekṣayānyasya yadrūpam⁽⁶³⁾ avadhāryate

tad asat tatra tattvena pārāpārādibhedavat⁽⁶⁴⁾ //⁽⁶⁵⁾

iti nyayān na bhūtārthena sāvaṃyavatvam iti cet.

na. pārāpārāyora⁽⁶⁶⁾ api bahirarthavādināṃ vyapekṣābhedenāsāṃkaryāt pitāputrādivat
tāttvikam eva rūpam ity abhyupagantavyam. yadapekṣayā hi tat pāram⁽⁶⁷⁾, na jātu
tadapekṣayā tad apāram⁽⁶⁸⁾ iti. anyathā pārāpārāyora⁽⁶⁹⁾ apāramārthikatve katham
pārāpārābhīdhāna⁽⁷⁰⁾-taṣasthitayora⁽⁷¹⁾ asāṃkaryeṇāvasthānam⁽⁷²⁾. tathā hi pārābhīmatād
anyatvam eva vivakṣitasāpārāsyāpārātvam⁽⁷³⁾ ucyate. tasya ca kalpitatve tayora
aikyaprasaṅgaḥ. tathā ca na tadāśritānām asāṃkīrṇāvasthītiḥ syāt. na hi kalpanoparac-
ito⁽⁷⁴⁾ bhedo 'rthakriyāṅgam.

⁽⁵⁸⁾ athāsaṃyukta W, V, T: athāsamprayukta MsC.

⁽⁵⁹⁾ eva W, V, T: evaṃ MsC.

⁽⁶⁰⁾ samīpat° W: samīpet° V, T, MsP, MsC, shin tu nye ba na Tib..

⁽⁶¹⁾ parivṛta W, V, T: parivṛtta MsP, MsC.

⁽⁶²⁾ cen W, V, T: cetan MsP.

⁽⁶³⁾ yadrūpam: yad rūpam W.

⁽⁶⁴⁾ pārāpārādi° V, MsC: pārāvārādi° W, T.

⁽⁶⁵⁾ BASK k. 49, Shastri [1967: 73.5–6], 神子上 [1986: 15].

⁽⁶⁶⁾ pārāpārāyora V, T, MsC: pārāvārāyora W.

⁽⁶⁷⁾ tat pāram W, V, T: tayoran MsP.

⁽⁶⁸⁾ apāram V, T, MsP, MsC: avāram W.

⁽⁶⁹⁾ pārāpārāyora V, T, MsC: pārāvārāyora W.

⁽⁷⁰⁾ pārāpārābhīdhāna° V, MsC: pārāvārābhīdhāna° W, T.

⁽⁷¹⁾ °taṣasthitayora W, V, T: °tadasthitayora MsP, °taṣ sthitayora MsC.

⁽⁷²⁾ asāṃka ryeṇāvasthāna W, V: asya kāryeṇāvasthānam MsC.

⁽⁷³⁾ vivakṣitasāpārāsyāpārātvam V, T: vivakṣitasāpārāsyāvārātvam W, vipakṣitasāpārāsyāvārātvam MsC.

⁽⁷⁴⁾ kalpanoparacito W, V, T: kalpitoparacitto MsC.

1.2.1.4. Śubhagupta の極微論批判

[小結論：所知の存在（＝外界対象）は一でもなく、多でもない。]

あるいはまた、(4) [中心の] 極微は [それを取り囲む諸極微と] 決して結合していないのだが、「[東等の] 方角 [の極微]」という語で語られ、ごく近い場所に位置する多くの極微によって囲まれているのだと [シュバグプタのように] 考えるならば、それは不合理である。何故ならば、[中心の極微に] こちら側・あちら側という側面がない時、上の言明が有意味に確立することはないからである。

【シュバグプタ⁷⁶⁾】それ (X) と別なもの (Y) を期待して、[Y とは] 別なもの (X) の本質が確定される場合、その [本質] は、そこ (X) に、真実としては存在しない。此岸と彼岸などの区別 [により想定される此岸性と彼岸性などが真実としては存在しない] のように⁷⁷⁾。

という論理に基づいて、実義としては [極微が] 部分を有することはない。

【立論者】そうではない。彼岸と此岸についても、外界実在論者たちにとっては、対関係 (vyapekṣā) に基づく区別による混同はないから、父と子などの [場合の] ように、必ず [此岸・彼岸それぞれに此岸性・彼岸性という] 実在的な本質があると認められなければならない。というのも、あるもの (此岸) を期待して、それ (彼岸) が彼岸である時、決してそれ (此岸) を期待して、それ (彼岸) が此岸であることはないからである。そうではなくて [つまり] 彼岸と此岸とが勝義的なものではないとするならば、どうして、「彼岸」・「此岸」という名称をもった [両] 岸に立つ二者が、混同されることなく位置づけられることがあろうか。すなわち、「彼岸」と考えられているものとは別であること (別性)こそが、[ここで] 述べようと意図されている「此岸」の「此岸性」と言われる。また、それ (別性) は構想されたものである [と認める] ならば、その両者 (「此岸」・「彼岸」) は同一のものになってしまうし、それ (別性) に依拠している者達が、混同されることなく位置づけられることはなくなってしまう。というのも、構想によって形成された区別は目的実現の要因ではない (=実在しない) からである。

⁷⁶⁾シュバグプタについては、Saccone [2019] を、シュバグプタの極微論については、Hattori [1960: 11–12]、神子上 [1983]、森山 [2003: 9–16]、真鍋 [2010] [2011]、Saccone [2015] [2018]などを参照。真鍋 [2010] が指摘するように、シュバグプタにとって、前後や東西などの方位は、集合している諸極微のなかに位置する特定の極微に対して仮に言語表現として想定されるものであり、諸極微の位置関係を指す。従って、極微に方位の区別があることは、極微が部分を持つことにならない。林 [2019] は、ハリバドラがシュバグプタ批判の際にカマラシーラなどの先人が引用しなかった 49 偈を用いて批判を展開することに注目し、49 偈に出る喩例をそのまま用いて外境論者の主張の矛盾を導き論難することでシュバグプタ批判に独自性を加えようとした、と指摘する。

⁷⁷⁾Cf. 神子上 [1983: 10–11]、Moriyama [1984: 45]、森山 [2003: 10]。

一次文献

- AAA See W, V, T.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, ed. Prahlad Pradhan, Tibetan Sanskrit Works Series 8, Patna: Kashi Prasad Jayawal Research Institute, 1967.
- BCAP *Bodhicaryāvatārapañjikā* (Prajñākaramati): *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā*, ed. P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts 12, Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1960.
- BASK *Bāhyārthasiddhikārikā*, ed. Shastri [1975], 神子上 [1986].
- D sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka.
- HB *Hetubindu* (Dharmakīrti): *Dharmakīrti's Hetubindu*, ed. Ernst Steinkellner, Beijing – Vienna: China Tibetology Publishing House and Austrian Academy of Sciences Press, 2016.
- LAS *Laṅkāvatārasūtra: The Laṅkāvatāra sūtra*, ed. Bunyu Nanjo, Kyoto: The Otani University Press, 1923.
- MA *Madhyamakālaṃkāra* (Śāntarakṣita): *Madhyamakālaṃkāra*, ed. Masamichi Ichigo, Kyoto: Buneido, 1985.
- MAP *Madhyamakālaṃkārapañjikā* (Kamalaśīla): See MA.
- MAV *Madhyamakālaṃkāravṛtti* (Śāntarakṣita): See MA.
- P Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka.
- PV III *Pramāṇavārttika*, chapter III (Dharmakīrti): See 戸崎 [1985].
- PV in II *Pramāṇaviniścaya*, chapter II (Dharmakīrti): *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, chapters 1 and 2*, ed. Ernst Steinkellner, Beijing – Vienna: China Tibetology Publishing House and Austrian Academy of Sciences Press, 2007.
- PVSV *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (Dharmakīrti): *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the first chapter with the autocommentary: text and critical notes*, ed. Raniero Gnoli, Serie Orientale Roma 23, Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1960.

- T *Abhisamayālaṃkāṛāloka* (Haribhadra): *The Abhisamayālaṅkāṛāloka of Haribhadra: being a commentary on the Abhisamayālaṅkāṛā of Maitreyanātha and the Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā*, ed. Giuseppe Tucci, Gaekwad's Oriental Series No. XLII, Baroda, 1932.
- TS *Tattvasaṃgraha* (Śāntarakṣita): *Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Shri Kamalashīla*, 2 vols., ed. Swami Dwarikadas Shastri, Bauddha Bharati Series 1, 2, Varanasi, 1968.
- TSP *Tattvasaṃgrahapañjikā* (Kamalaśīla): See TS.
- Tib. Tibetan translation
- V *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā With Haribhadra's Commentary Called Āloka*, ed. P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts 4, Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1960.
- Vimś *Viṃśikāvṛtti* (Vasubandhu): *Vijñaptimātratāsiddhi: Deux Traités de Vasubandhu: Viṃśatikā (La Vingtaine) accompagnée d'une explication en prose, et Triṃśikā avec le commentaire de Sthīramati*, Bibliothèque de l'École des hautes études, Sciences historiques et philologiques, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion, 1925.
- W *Abhisamayālaṃkāṛāloka* (Haribhadra): *Abhisamayālaṃkāṛ'Ālokā Prajñāpāramitāvyaḥkyā (Commentary on Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā) by Haribhadra, Together with the Text Commented on*, ed. Unrai Wogihara, Tokyo: The Toyo Bunko Publications, 1932–1935.

二次資料

荒牧典俊

[2005] 「唯識二十論」, 長尾雅人ほか『大乘仏典 15 世親論集』, 東京: 中公文庫, pp. 5–30.

Blumenthal, James

[2009] “Śāntarakṣita's “Neither-one-nor-many” argument from Madhyamakālaṃkāra (The ornament of the middle way): A classical Buddhist argument on the ontological status of phenomena,” *Buddhist philosophy: Essential readings*, eds. by W. Edelglass & J. L. Garfield, New York: Oxford University Press, pp. 46–60.

Dunne, John. D

[2004] *Foundations of Dharmakīrti's Philosophy*, Boston: Wisdom Publications.

Hattori, Masaaki

[1960] “Bāhyārthasiddhikārikā of Śubhagupta,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 8-1, pp. 9–14.

原田和宗

[1988] 「atiprasaṅga の系譜ノート」, 『印度学仏教学研究』73-1, pp. 116–119.

林拓望

[2019] 「ハリバドラの『八千頌般若経大註』に引用される『外境成就論頌』第49偈の意味」, 『印度学仏教学研究』68-1, pp. (130)-(133).

兵藤一夫

[2000] 「般若経釈現観莊嚴論の研究」, 京都: 文英堂書店.

一郷正道

[1985] 『中観莊嚴論の研究—シャーンタラクシタの思想—』, 文栄堂.

[2011] 『瑜伽行中観派の修道論の解明—『修習次第』の研究—』, 2008年度～2010年度科学研究費補助金基盤研究(C)成果報告書.

[2015] 『ハリバドラの伝える瑜伽行中観派思想』, 東本願寺出版.

岩田孝

[1997] 「『定説集成』(Sthitisamuccaya) 和訳研究—無形相知識論瑜伽行派の定説(1)—」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』43, pp. 3–14.

[1999] 「『定説集成』(Sthitisamuccaya) 和訳研究—無形相知識論瑜伽行派の定説(2)—」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』45, pp. 13–26.

[2011] 「『定説集成』(Sthitisamuccaya) 和訳研究無形相知識論瑜伽行派の定説(3)—知識における形相の存在の否定—」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』56, pp. 5–17.

桂紹隆

[1969] 「ダルマキールティにおける「自己認識」の理論」, 『南都仏教』23, pp. 1–44.

[1983] 「ダルマキールティの因果論」, 『南都仏教』50, pp. 96–114.

Kyuma, Taiken

[1997] “Incompatibility of Difference,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 45-2, pp. 24–27.

[1999] “bheda and virodha,” *Dharmakīrti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy: proceedings of the Third International Dharmakīrti Conference, Hiroshima, November 4-6, 1997*, ed. by Shoryu Katsura, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, pp. 225–232.

真鍋智裕

- [2010] 「極微において方位の区別と単一性は両立するか—カマラシーラとシュバグプタの対論—」, 『印度学仏教学研究』 59-1, pp. 422-419.
- [2011] 「部分を有しない極微に場所的前後関係は存在し得るか—カマラシーラとシュバグプタとの対論 (2) —」, 『久遠』 2, pp. 32-44.

真野龍海

- [1975] 『梵文八千頌般若経索引 現観莊嚴論の研究 (続)』, 東京: 山喜房佛書林.

神子上恵生

- [1978] 「物にそなわる普遍的機能 (Sāmānyā-śakti) と特殊的機能 (Pratiniyatā-śakti)」, 『龍谷大学仏教文化研究所紀要』 17, pp. 1-15.
- [1983] 「シュバグプタの極微説の擁護—知識の認識対象の問題をめぐって—」, 『龍谷大学佛教文化研究所紀要』 22, pp. 1-17.
- [1986] 「シュバグプタの Bāhyārthasiddhikārikā」, 『龍谷大学論叢』 429, pp. 2-44.
- [1997] 「唯識学派による外界対象の考察 (1) —Tattvasaṃgraha と Tattvasaṃgrahapañjikā の 23 章外界対象の考察—」, 『インド学チベット学研究』 2, pp. 87-109.

森山清徹 (Moriyama, Seitetsu)

- [1984] “The Yogācāra-mādhyamika Refutation of the Position of the Satyākāra and Alikākāra-vādins of the Yogācāra School, Part 1: A Translation of Portions of Haribhadra’s Abhisamayālaṃkāra-lokā Prajñāpāramitāvyaḥyā,” 『佛教大学大学院紀要』 12, pp. 1-58.
- [2003] 「シャーントラクシタの中観思想の形成とシュバグプタ、シャーキャブッディ—自然界 (原子、物質) と知識の峻別の根拠—」, 『佛教大学総合研究所紀要』 10, pp. 5-26.

Nagatomi, Masatoshi

- [1967/68] “Arthakriyā,” *The Adyar Library Bulletin* 31-32, pp. 52-72.

Saccone, Margherita Serena

- [2015] “The Conception of Atoms as Substantially Existing in Śubhagupta,” *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 38, pp. 107-137.
- [2018] *On the Nature of Things: A Buddhist Debate on Cognitions and their Object*, Wiener Studien Zur Tibetologie Und Buddhismuskunde 94, Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.
- [2019] “Śubhagupta,” *Brill’s Encyclopedia of Buddhism*, Volume II: Lives, eds by Jonathan A. et al., Leiden / Boston: Brill, pp. 458-462.

Shastri, N. A.

- [1975] “*Bāhyārthasiddhikārikā*”, *Bulletin of Tibetology* 4-2, pp. 1–96.
- Silk, Jonathan A.
 [2016] *Materials Toward the Study of Vasubandhu’s Viṃśikā (I): Sanskrit and Tibetan Critical Editions of the Verses and Autocommentary, An English Translation and Annotations*, Harvard Oriental Series 81, Cambridge MA: Department of South Asian Studies, Harvard University. (The Open Access Edition was published in 2018)
- 菅沼晃
 [1981] 『『撰真実論』外境批判章訳註(一)』, 『大乘仏教から密教へ 勝又俊教博士古稀記念論集』, 東京: 春秋社, pp. 573–585.
 [1985] 『『撰真実論』外境批判章訳註(二)』, 『仏教の歴史と思想 壬生台舜博士頌寿記念』, 東京: 大蔵出版, pp. 95–104.
- Tillemans, Tom J. F.
 [1983] “The ‘Neither one nor many’ argument for śūnyatā and its Tibetan interpretations,” *Contributions on Tibetan and Buddhist religion and philosophy*, eds. by E. Steinkellner & H. Tauscher, Vienna: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien, pp. 305–320.
- 戸崎宏正
 [1985] 『仏教認識論の研究—法称著『プラマーナ・ヴァールッティカ』の現量論—』下巻, 東京: 大東出版社.
- 吉水千鶴子
 [1999] 「恒常なものはなぜ無能力か」, 『印度学仏教学研究』48-1, pp. 196–200.

An Annotated Translation of the Neither-one-nor-many Argument in *Abhisamayālaṃkāṛālokā* XVI (1): The Criticism of Atomic Theories

Summary

This paper is the first part of an annotated translation of the neither-one-nor-many argument in *Abhisamayālaṃkāṛālokā* chapter XVI by Haribhadra. In the neither-one-nor-many argument Haribhadra first proves that the nature of ‘being devoid of either one or many intrinsic natures’ is a valid reason to demonstrate that entities ultimately have no intrinsic nature (i.e., are empty).

This paper takes up the section in which the author proves that the logical reason is not unestablished (*asiddha*) in the subject of the thesis (*pakṣa-dharmīn*) by examining every possible subject of the thesis, whether external or internal. This section takes up the

concept of atoms, which are considered to be the smallest units of external reality. Problems concerning atoms, such as whether they exist or not, were discussed by Buddhists in their debates with non-Buddhist schools; this section is noteworthy in that it provides a succinct classification of the theories of atoms found in various schools.

Professors Seitetsu Moriyama and Masamichi Ichigo have published translations of the relevant portions of the *Abhisamayālaṃkāṛālokā*; however, we found that there are some places that can be improved. Therefore, we have revised the Sanskrit text and translated it by consulting the translations of Profs. Moriyama and Ichigo. Many passages of this section are identical with those found in Kamalaśīla's *Madhyamakālaṃkārapañjikā* and *Tattvasaṃgrahaṇjikā*. We have identified these passages in the footnotes of the present translation.

Synopsis

0. <prayoga 1>Entities ultimately have no intrinsic nature (i. e., are empty) because they are devoid of either one or many natures.

1. The logical reason is not unestablished (*asiddha*).

1.1. What is an “Entity”? That which effects a purposeful action.

1.2. Entity is either *jñeyarūpa* or *jñānarūpa*.

1.2.1. Entity as *jñeyarūpa*: the examination of atomic theories.

1.2.1.1. Criticism of Vaiśeṣika theory of atoms (criticism of *avayavin*).

1.2.1.2. Criticism of Vaiśeṣika theory of atoms <prayoga 2>.

1.2.1.3. Criticism of Sautrāntika theory of atoms.

1.2.1.4. Criticism of Śubhagupta theory of atoms.

[Conclusion: Entity as *jñeyarūpa* (= external object) is neither one nor many.]

キーワード 離一多自性論証, 極微, ハリバドラ, *Abhisamayālaṃkāṛāloka*